

平成 27 年度学校協議会

< 協議会委員 > (敬称略)

- ・古郷 幹彦 (大阪大学大学院歯学研究科教授)
- ・森田 英嗣 (大阪教育大学教育学部教授)
- ・高尾 千秋 (神戸大学発達科学部非常勤講師)
- ・竹村 伍郎 (地域情報誌「うえまち」編集局長)
- ・永安 卓 (大阪市立高津中学校 校長)
- ・徳山 豪 (本校前 PTA 会長)
- ・中川 哲也 (本校 PTA 会長)

／平成 27 年度 第 1 回学校協議会議事録

○日 時：平成 27 年 7 月 24 日 (金) 18 時～19 時 30 分

○場 所：大阪府立高津高校 校長室

○主な協議テーマ

1. 平成 27 年度学校経営計画及び学校評価等について
2. Global Leaders High School 評価について
3. 本校の特色ある教育活動 (特に、サイエンス及び英語関係) について

○出席者 (敬称略、委員は 50 音順)

- 会長 古郷 幹彦 (大阪大学大学院歯学研究科教授)
委員 高尾 千秋 (神戸大学発達科学部非常勤講師)
竹村 伍郎 (地域情報誌「うえまち」編集局長)
徳山 豪 (本校前 P T A 会長)
中川 哲也 (本校 P T A 会長)
森田 英嗣 (大阪教育大学教育学部教授)
校長 村田 徹

○事務局 上田信雄 (教頭)、石田 暁 (事務長)、伊勢田 佳典 (首席)、野口 隆子 (首席)、菅 康之 (企画広報部長)、中村 順子 (企画広報部・記録係)

【会議概要】

1. 校長挨拶

2. 説明主旨

①平成 27 年度学校経営計画及び学校評価等について

・「めざす学校像」「中期的目標」には、大きな変更はなく継続して取り組んでいく。

・「魅力ある授業の実施」については、生徒向け授業アンケート項目 8（内容に興味関心が持てた）・9（知識や技能が身についた）の平均点のさらなる引きあげに目標を絞って取り組む。

・「講習・補習の充実」については、難関国公立大学への合格者数を増加させたうえで、維持に努める。

・「英語運用能力の向上」については、TOEFL への取組みをより具体化していく。来年度から、AE（アドバンスド・イングリッシュコース）を立ち上げ、文理学科・普通科両方から希望者を募る。

・「遅刻指導」については、昨年度、年間遅刻者数 2,000 以下を達成した。これを維持していく。

・「教員間の情報共有」については、教頭が毎日発信する予定確認メールのおかげもあり、メールの活用が進んできた。情報を見る機会の増加とともに、共有する内容の質的な向上を図る。

②Global Leaders High School H26 年度評価について

・「総合評価」は AA（上から 2 番目の評価）となり、昨年より高い評価を得た。

・H27～29 年度の 3 年間の再指定を受けたが、本校教育の質を担保するため、H30 年度以降も継続的に指定を受けたいと考えており、数値目標など厳しい側面もあるが、100 周年も念頭に、教職員はもとより、PTA・同窓会をはじめ「オール高津」の力を結集して取り組んでいく。

③本校の特色ある教育活動（主に、サイエンス及び英語関係）について

・サイエンスに関する宿泊研修

東京近辺「夏のサイエンスツアー」(3日間)

韓国全州市周辺「日韓交流事業—河川の環境調査」(4日間)

大分、阿蘇、熊本方面「冬のサイエンスツアー」(3日間)

マレーシア方面「海外サイエンスツアー」(5日間)

・英語に関する宿泊研修

ロンドン近郊での「国際交流研修」(15日間)

静岡県での「TOEFL 集中研修」(3日間)

・その他

GLHS10校の生徒によるハーバード・MIT 研修(8日間) など

■委員から出された主な意見等

【平成27年度学校経営計画及び学校評価等に関して】

○それぞれの計画に数値目標が掲げられているが、目標に縛られすぎると、学校に閉塞感が漂いがちである。教職員の意見も踏まえたうえでの目標ということなので大丈夫だと思うが、ある程度のゆとりを持ちながら進めてもらいたい。

【Global Leaders High School 評価に関して】

○評価項目・資料に関して、例えば、センター試験に関して、5教科7科目受験者の割合が評価指標になっており、受験するだけで評価されるという設定には違和感を持つ。

○5教科7科目受験者割合は、高い志を持って挑戦していることの「数値化できる一つの指標」ということだろう。受験者の中で得点率8割以上の割合という指標もあり、受験者割合が高い方が、得点率8割以上の数も多く、志と実績は一定連動しているものと考えられる。

【本校の特色ある教育活動に関して】

○「日韓交流事業」では、英語での交流が基本だということだが、生徒が主体的に課題に

取り組む機会がうまく設定されており、こういう取組みにこそ価値があるように感じる。

○英国研修の費用が約 45 万円となっているが、やはり高くて負担が大きいのではないかと。日本での交流を希望している海外の高校もあると聞いており、高津高校としてそのような学校・生徒を受け入れる形の方が、生徒たちにより多くの機会を提供できるのではないかと。

○これらの取組みについては、企画・立案も含めて各学校の教員が行うそうだが、正直、大変だろう。教員の個人的なつながり等によって、支えられている部分が多いとも聞く。一部の教員だけで進めるのではなく、学校（教職員）全体で取り組んでいく形にすること、より組織的な対応が喫緊の課題だろう。

【その他 ～今後の方向性等に関して～】

○高津生だけではないが、若者の「ここぞ」というところで集中して勉強する力、踏んばる力が低下しているように感じている。どちらかといえば、(過剰とも言える) サービスを受けることに慣れてしまっている生徒に、どこまで自由に行動させるのか、自己責任を求めるのか、難しいところで、葛藤がある。

○例えば、昔はボードゲームを多人数でやり、一人だけやめることはできなかったが、今はスマホで、都合が悪くなれば簡単にリセットできてしまう。一言でいうと、(他者が関係する)「段取り」が下手。家でも、子どもに「8割は段取りで決まる」と話すが、いくら話しても場当たりの準備に留まっている。

○多くの大学で「初年次教育」を取り入れざるを得ない状況だが、高津卒業生の多くは、大学生活にあまり戸惑うことなく、スムーズに馴染むことができていると聞いている。

○高津は従来、割と自由で、ある程度勉強もできるということで人気だったが、その流れを汲む卒業生が、うまく大学生活に対応できているという事実が確認されれば、時代の変化に応じた高津の新しい魅力ともなりうるだろう。

○同窓会やインターネット等を通じて、卒業生を追跡し、その結果を前面に出して高津の新しい魅力をアピールしてはどうか。

【今後の日程】(予定)

第2回 平成27年12月18日（金）午後6時

第3回 平成28年3月18日（金）午後6時

／平成27年度 第2回学校協議会議事録

○日 時：平成27年12月18日（金） 18時45分～20時

○場 所：大阪府立高津高等学校 校長室

○出席者（敬称略、委員は50音順）

会長 古郷 幹彦（大阪大学大学院歯学研究科教授）

委員 高尾 千秋（神戸大学発達科学部非常勤講師）

竹村 伍郎（地域情報誌「うえまち」編集局長）

徳山 豪（本校前PTA会長）

中川 哲也（本校PTA会長）

校長 村田 徹

○事務局 上田信雄（教頭）、石田 暁（事務長）、伊勢田 佳典（首席）、野口 隆子（首席）、菅 康之（企画広報部長）、小田 勝士（企画広報部・記録）

【会議概要】

1. 校長挨拶
2. 学校からの説明

①学校経営計画の進捗状況について

まだ結果の出ていない項目も多いが、現時点ではすべての項目において大きな遅滞・齟齬なく進めることができおり、成果指標もほぼ達成できている。

*以下、項目と概要を列記する。

○「魅力ある授業の実施」について

○「英語運用能力の向上」について

TOEFLへの取組みは、来年度からAE（アドバンスド・イングリッシュコース）を立ちあげ、文理学科・普通科双方から計80名の希望者を募る。学校説明会等で周知に努め、感触も上々。

○「自己実現に向けた体験型進路学習」について

○「生徒の自主的活動の活性化」について

- ・部活動加入率
- ・記念祭（体育祭・文化祭）における生徒実行委員会に参加する生徒数

○その他

・記念祭を9月上旬に実施することで、生徒の集中力が研ぎ澄まされ、内容は例年に勝るとも劣らないものであった。また、同時に学習への生徒の自覚も高まり、以前から指摘されていた「11月実施の外部模試での成績落ち込み」は見られなかった。

・10月から、有志教員の付き添いで午後8時まで自習室を開設している。平均100～150人の生徒が利用しており、下校の際には「ありがとうございます」と礼を言う生徒も多い。

・来年度より1・2年生全員による土曜講習を実施するにあたって、課題となっていた実施場所の確保については、大阪市立社会福祉センターを借りることができる目途が立った。

②SSH中間報告について

今年度は、SSH事業指定2期目の中間年（3年目）であることから、12月4日に文部科学省を訪れ、事業の中間報告を行ってきた。概要は以下の通り。

・本校のSSH事業は、平成20年度の第1期の指定時には20～30人の「SSHコース生」の募集から始め、平成23年度のGLHS指定を機に対象を文理学科生徒全体に広げ、文系・理系の枠を越えて、科学的思考・調査・検証等の道筋を学ぶことができるよう、すべての教職員の理解、協力のもと築きあげられてきた。

・この間、生徒、教職員はもとより、関わっていただいたほとんどの方々から高い評価を

得ており、平成 27～29 年度は、事業を担う組織の確立と次世代のリーダーの育成に努め、平成 30 年度の第 3 期目の指定も視野に入れながら、全国に発信可能な「SSH 高津モデル」の完成をめざしていく。

③平成 28 年度行事予定（主に、記念祭と定期考査）について

・本年、記念祭を 9 月下旬から 9 月上旬に変更し、暑さ対策のためにミストシャワー等を準備したが、今年の 9 月は寒く、稼働しないで済んだ。来年度も同時期に行い、引き続き検証を行いたい。

・本校では、2 学期制導入以来、年間 4 回の定期考査を行ってきたが、どうしても定期考査間のインターバルが長くなり、結果として、とりわけ単位数の多い教科・科目で十分に咀嚼できないまま、大量の試験範囲となり、学習意欲の低下が生じることや、夏季休暇前、緊張感に欠けた状態で授業に臨む傾向がみられることから、2 学期制を実施しているほとんどの高校では定期考査を 5 回実施している。

・単に回数を増やすだけでなく、高津らしさを担保しながら、イメージとしては、Hop（5 月）・Step（9 月）・Jump（2 月）の従来の定期考査を柱に、Challenge（7 月）・Charge（12 月）を図る考査を実施することで、生徒たちが無理なく、また、これまで以上に年間を通じて継続的・効果的な学習を行えるよう、定期考査の配置・回数（5 回実施へ）を見直す予定である。

④その他

・学校生活における安全・安心をさらに担保する観点から、本校においても校内（更衣室等）での窃盗・窃視等事案が根絶されない中、校内のセキュリティ対策等について検討している。プールに面格子を設置したほか、卒業生のクラブ練習参加のルールづくりなどを検討しているが、これまでの学校文化にはなじまないというジレンマもあり、ぜひご意見をいただきたい。

3. 質疑応答、およびご意見

【記念祭の時期】

Q：時期を早めた場合、生徒たちは記念祭準備をいつ頃から始めているのか。

A：夏休み後半くらい（盆明け）から始めているところが多く、短期間で集中的に取り組もうとする姿勢が見られ、出来栄等については、これまでと比べてもさほど遜色はないように感じている。

Q：台風の影響も気になるが、9月上旬と下旬ではどちらが多いだろうか。

A：年によって変動があり、影響の大小を比較することは困難。

○生徒は概ね元気だろうが、やはり体調不良者は出る。また、保護者に体調不良の方が出ることもある。引き続き、万全の備えをしていただきたい。

○実施時期を早めることで、学力向上に効果があるのならば継続することが望ましい。引き続き、検証を続けてもらいたい。

【定期考査の回数】

○夏休み前に何もないと、どうしても授業に対する緊張感が欠けるのは否めない。生徒の過重な負担にならないよう配慮は必要だが、例えば7月に実施する考査では、夏休みの自主的な学習につながるような出題も検討してもらおうなど、子どもたちの学習面での自主性をうまく引き出してもらえれば効果的だろう。

○考査の回数だけを増やしても一夜漬けでは意味がないし、定着しない。回数を増やすと同時に、先生方一人ひとりが自分の声で学校としてのメッセージをしっかりと伝えることが大切なので、よろしく願いしたい。

【校内のセキュリティ対策】

Q：外部の来校者にはどのような対策を行っているか。

A：業者には“来校者ホルダー”をつけてもらっている。また、来年度からは、保護者全員に名札ホルダーを配り、来校の際にはつけてもらうことを検討している。名札に対して抵抗感がある教職員もいるが、名札を着けて外部の者と区別しようと考えている。

○外部の者からすると、教職員が名札を着けてもらっていると、安心して声かけられる。

○アメリカでは入り口は1カ所のみ、非常に厳しいチェック体制である。学校に監視カメ

ラを置くことには違和感があるという意見も必ず出るだろうが、2か所の出入口にカメラを設置してはどうだろうか。

○ダミーのカメラでも抑止力は期待できないこともないが、やはりダミーはすぐにわかってしまう。

○集合住宅での防犯カメラはあたり前になった。私立学校でも普通になっている。録画し上書きで消していく形なら、価格も安く費用の点でも設置しやすい。

○OB・OGを含め、それ以外の来校者に対しては、出入口に「名前を書いてお入りください」と書いて置いておくだけでも一定の効果はあるだろう。

○用件も記入してもらうようにすれば、より良いのではないか。

○これからの時期は、多くの卒業生が調査書等を取りに来る。OB・OGがクラブ活動に参加したり、懐かしくて遊びに来るケースもあるだろう。その場合も、面倒だが、必ず記録などを用意しておいて、見える形で残しておくということを習慣づけていくことが必要だろう。

○セキュリティを高めようとするのなら、ある程度は手間が増えるのは避けようがない。

○学校における安全・安心な環境づくりは、今や不可避な取組みであり、防犯カメラを設置することを勧める。

併せて、受付簿・名札ホルダーなど、すぐに定着することは無理でも、5年、10年と継続し続けることで、卒業生はもとより、すべての来校者が「高津生の安全・安心のためだ、面倒がらずに協力しよう」という意識が定着するよう、丁寧に取り組んでもらいたい。

【今後の日程】(予定)

第3回 平成28年3月18日(金) 午後6時

／平成27年度 第3回学校協議会議事録

○日 時：平成28年3月18日(金) 18:00～19:30

○場 所：大阪府立高津高等学校 校長室

○出席者：(敬省略、委員は 50 音順)

- 委員 高尾 千秋 (神戸大学発達科学部非常勤講師)
- 竹村 伍郎 (地域情報誌「うえまち」編集局長)
- 徳山 豪 (本校前 PTA 会長)
- 中川 哲也 (本校 PTA 会長)
- 森田 英嗣 (大阪教育大学教育学部教授)

校長 村田 徹

○事務局 上田 信雄 (教頭)、石田 暁 (事務長)、伊勢田佳典 (首席)、

野口 隆子 (首席)、菅 康之 (企画広報部長)、望月俊紀 (進路指導主事)

松下 信之 (企画広報部・記録係)

【会議概要】

1. 校長挨拶
2. 学校からの説明

(1) 学校経営計画について

① 平成 27 年度学校経営計画達成状況

まだ最終的な結果が出ていない項目も少しあるが、概ね、ほぼすべての項目において、当初目標を達成することができた。

*以下、項目と概要を列記する。

○「魅力ある授業の実施」について

・ 生徒向け授業アンケートの項目 8・9 についての結果は、3.23 と目標値(3.2 以上)を達成した。さらなる授業力の向上を図りたい。

○「英語運用能力の向上」について

- ・ 実用英語技能検定試験（英検）2級の合格者は138人となり、目標(100人)を達成した。
- ・ H28年から導入するTOEFL iBT受験に向けたコースについて、希望者が定員(文理学科、普通科各40名)を大幅に超えた。

○「生徒の自主的活動の活性化」について

- ・ 文理学科2年次の課題研究講座の充実について、アンケートでの満足度が94%となった。また、外部助言者からの評価も概ね高く、午後からの普通科の生徒の参加者数も163人と目標値(150人)を超えた。

○その他

- ・ 遅刻の数は2,137件と目標(2,000件以下)はクリアできなかったが、怠惰による遅刻の数は確実に減少している。
- ・ 生徒の保健室利用・教育相談の満足度は75%となり、目標を達成した。保護者の満足度は61%と低いものの、「わからない」という回答が28%と高いため、今後さらに周知に努めたい。

② 平成28年度学校経営計画については、基本的にはH27年度の計画を踏襲した。

*以下、新たに追加した項目について、項目と概要を列記する。

○「魅力ある授業の実施」について

- ・ H29年度までに全教科で「Can-doリスト」を作成し、明確な学習の道標を提供するとともに、H30年度までに学校全体として、各教科単位で共通した「高津授業メソッド」を完成させる。

○「英語運用能力の向上」について

- ・ TOEFL iBT（チャレンジ）のスコア取得の目標を平成29年度までに大阪府教育委員会（現：教育庁）が提示しているステージ2（対象人数の10%以上が80点以上、20%以上が60～79点）に引きあげる。
- ・ H28年度から導入するTOEFL iBT受験に向けたコース（AEコース）生徒の満足度85%以上をめざす。

○その他

- ・ 生徒・教員向け学校教育自己診断での定期考査をはじめとした行事計画のバランスに関する肯定率を80%以上とする。

(2) 学校教育自己診断について

- ・ 生徒・保護者に対するアンケート結果に関しては、多くの項目で昨年度を上回ることができた。とりわけ、授業力、進路保障について、高い数値を上げており、学校生活全般についても生徒の満足度は高い。
- ・ 全体的に昨年度と比べて、教師の肯定率の上昇が生徒・保護者ほどではないので、次年度以降、教師の肯定率も更に上昇するよう努める。

(3) スーパーサイエンスハイスクールの中間結果の結果

① 中間評価の結果

- ・ 「これまでの努力を維持することによって、研究開発の達成がおおむね可能と判断されるものの、併せて取組改善の努力が認められる」との結果であった。

② 中間評価における主な講評

- ・ SSH 事業や課題研究の指導に関わることが、教員の資質向上につながっていることが明確に教員の共通認識になっていることが評価されている。
- ・ 生徒の変容についての評価方法として、意識調査や教員観察などを行っているが、更に多面的、客観的、定量的な評価方法の研究・導入が求められている。
- ・ 科学技術人材育成重点枠での取組と SSH 本体との相互関連性を高め、課題研究の充実や部活動の活性化につなげていくことが望まれている。

(4) 平成 28 年度大学入試について (中間報告)

① センター試験について

- ・ 68 期生の在籍 354 名中、受験者数は 347 名 (98.0%) と高かった。
- ・ 全国平均と比較すると、本校生徒の点数の伸びが顕著であった。
- ・ 理系志望者が文系志望者より多いが、平均点は文系志望者の方が高かった。今後、下位層 (6 割以下) の底上げが更に求められる。

② 入試結果について (中間報告)

- ・ 68 期生の特徴として、出願に際してより難易度の高い大学をめざす (チャレンジする)

生徒が増えた

- ・ 前期での国公立大学の合格者は例年に比べ増えている。
- ・ 前期での医学部医学科への合格者が9名となっている。

(5) H28 行事予定について

- ・ 定期考査を年間5回実施することとした。来年度実施した上で、その成果を検証したい。

3. 質疑応答、およびご意見

【平成27年度学校経営計画及び平成28年度学校経営計画（案）について】

・ 今年度も、学校経営計画に沿って、計画的に学校経営を進めていただき、概ね目標も達成できている。来年度の計画（案）も、これまで積み上げてきた実績をさらに補強していくものとなっており、適当である。

・ とりわけ、「授業メソッド」を統一するという発想はとても良い。授業の形を統一することで、新しく赴任された先生も助かる。作ったうえで、それを維持していくことが大切である。個々の教員の良いところは伸ばしつつ、学校全体が一丸となって、より良い授業ができるようにしていただきたい。

・ 教員の年齢構成が、いわゆる「ワイングラス型」になっている現状があるということだが、そこへの対応という意味でも「高津授業メソッド」の構築は、教員の経験を伝えることにつながる効果的なものだと思う。今後想定される教員の世代交代がスムーズに進むよう、3～5年スパンで計画的に対応していただきたい。

【平成28年度大学入試結果（中間報告）について】

・ 中間報告ではあるが、昨年度をさらに上回る結果となっており、進路指導部を中心とした学校全体での継続的な指導が、功を奏していると思われる。引き続き、生徒の希望進路の実現に努めていただきたい。

【平成28年度行事予定について】

・ 生徒の希望進路の実現に向けて、より効果的な行事予定を考えていく中で、具体的な対策として、来年度、夏季休暇の前に考査を加えるということだが、生徒たちが自主的に自らの課題克服等に取り組むためには、やはり夏季休暇はポイントとなる重要な期間であり、その直前に考査を行い、生徒一人ひとりが自分の状況をしっかりと認識できる機会を設けることには、大きな意味がある。負担という声もあるだろうが、そこへの配慮も盛り込みながらうまく定着させてもらいたい。